

魚とり

井口昭久

土曜日、昼食に近くのレストランへ一人で行った。

六月の雨が降ったり止んだりしていた。雨の匂いは田舎での田植えを思い出させた。

レストランの窓際に座って外を眺めていると、コンビニが見えた。駐車場へ車が着き、客が流れ込むように店へ入って行った。

私は幼い頃夢中になった「瓶受け」(地方によつて「つけ瓶」ともいわれるらしい)という魚取りを思い出した。首がくびれており魚が一旦中に入ると出られなくなる仕組みの透明なガラスで作られた瓶を私たちは「びん受け」と呼んだ。

い込んだ者の獲物になるのか? いつも結論は出なかった。多くの場合「ざる」で待っていた者の所有になった。最初に魚を掴んだ者が所有権を放さなかった。

三つ目が「瓶受け」で、匂いにつられて入った魚が出られなくなってしまう仕掛けになっていた。仕掛けておくだけで、泥鰌などの小魚が入っていた。成人になって経験したクラブに似ていた。入ってしまった魚は間違いなく仕掛けたものの所有である。私が人生で初めて知った不労所得の醍醐味であった。しかし子供心に、そのような行為にうしろめたさを感じていた。いつの頃からか、その漁法は禁じられてしまった。私は、働かずに儲ける仕組みが道徳的に悪いから禁止されたと思っていた。しかし禁止の理由は、「不労所得がいけない」ということではなく、ガラス片によるケガが多かったためであつたらしい。たしかに不労所得が罪になれば資本主義は成り立たない。

子供が魚を取る方法には四つあった。一つは手で掴むことであつた。単純で素材であつたが、動いている物をつかまえることほど楽しいことはなかった。今でも歓声を立てて逃げ回る孫を捕まえるのは面白いことだ。しかし小川で泳ぐ魚をつかまえるのは孫を捕まえるほど単純ではなかった。

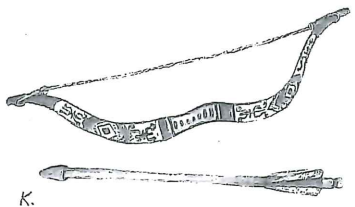
二つ目は「ざる」で捕るのであるが、これが最も成果があつた。川の下流で「ざる」を受けている者がおり、上流から魚を追い込んで捕まえた。大物が捕れた時は幼なじみのタケちゃんや喧嘩になつた。捕れた魚は「ざる」を持って待っていた者に所属するか、追

私はいかにして働かずに金を儲けるかに腐心してきたが、成功したことはなかった。

田舎のゴルフ場は一番高い時に買って今は只同然で買い手もない。私は「働かずに儲かる」という誘惑に弱かった。

四つ目は魚釣りであつた。天竜川での魚釣りは、じつと辛抱して待たなければならなかつた。思わせぶりに水面に浮いている「うき」は沈む時に期待を持たせ、引き上げるときに落胆させた。同じことを繰り返して飽きることがなかった。

駒ヶ岳にかかる雲を眺めて無為な夏の午後を過ごした。はかなかつた青春時代の「恋心」のように成果はなかった。



K.